

みんな遊びにおいでよ!!



木村元思さん

葛巻町畜産開発公社
ふれあい企画担当

木村さんが初めて「くすまき高原牧場」と出会ったのは、大学3年の秋。祖父母に「いい所がある」と誘われ、何気なく訪れたのがきっかけでした。

「その時の感動は、今でも覚えています」盛岡市で生まれ育った木村さんの遊びのフィールドは、自宅のすぐ横に広がる岩手牧場（旧種畜牧場）。一面に広がる牧場の雄大な景観に圧倒され、忘れかけていた幼少時代の「牧場」を思い出したそうです。

「持続可能な町づくりへの先進的な取り組みにも共感を持ち、その時から心のどこかでくすまき高原牧場へのあこがれが生まれたのは間違いありません。私が実感してきた牧場の素晴らしさを、さらに今の子どもたちに伝えたいという思いを抱くようになりました」と入社の際を話します。

「青少年の教育は、全世界共通の命題であり、公共の教育機関のみならず民間団体や企業もそれに参加し、より積極的に連携を取りながらサポートしていくことが望ましいと考えています。牧場には食料生産現場という社会的役割のほかにも、食の教育の場、自然体験の場、癒しの空間といった役割を担うだけの環境が整っています。それらを1つずつ丁寧に抽出し、実践することが私の命題」と新しい取り組みにも意欲をみせています。

「これからも続けてほしい」子どもたちが帰ってから、受け入れ農家はもとより、スノーワンダーランドの事務局にもお礼のメールや電話などがたくさん届いています。折元さんの家にホームステイした誉田成美さん（小5）の母幸子さんは、雑誌の紹介記事でスノーワンダーランドを知り、不安と迷いを振り払い、場所も分からない葛巻での冒険に参加されました。「福

岡では経験できない内容と生リズム、十四日間という期間」が決めた手になったようです。牛の出産に立ち合い、生まれた子牛に「ナルハナ」と名付けたこと、共進会の優勝メダルをもらってきたことなど、葛巻の話はやはり尽きないようです。「十四日間は親子にとっても互いに良い時間でした。また参加したいと言っています。葛巻のすばらしい活動をこれからも続けてい

「子どもが生まれて感動」ホームステイは仲間との生活に少し慣れた六日目から二泊三日で行われました。今年初めて受け入れた清水野公紀さん（38歳・江刈馬淵）の家には男子二人が滞在し、運良く牛の出産も手伝いました。イグルーづくりに興味をもった参加したという豊田知暁くん（小6・仙台）は「ホームステイがとても楽しかったです。牛の世話もいろいろか

牧場の多面的な機能を活用 保育・教育・やすらぎ・再生の場に

「とでもいい子たちでした。自然の大切さや酪農のことを少しでも理解してもらえればいいと思います。『牛乳飲んでもらわないと、おじちゃんたち大変なんだ』と話したら牛乳の飲めない子が口にしてくれた。かわいいですね。いいことなので、もっと多くの人に経験してもらいたい。特に子育て世代にとっては勉強になることが多いと思いますよ。受け入れは、自分たちの町をアピールし、田舎

「生産現場が忘れられ、食や命についても正しく考えられないのは、すべては体験のなさからきているように思う。都会で出来ないことを山村で行い、山村の必要性を都市住民にも認識していただく機会を今後も拡充していきたい」と抱負を語ります。町の持てる資源を最大限に生かし「葛巻町を発信」しながら、地域活性化への挑戦はさらに続きます。



4日掛かりで積み上げたイグルーが完成

スノーワンダーランドは、冬の牧場を舞台に、「自然・自分・仲間」と正面から向き合う二週間。子どもたちは、共に笑い、励まし合い、感動を共有する過程で、真に友達と呼び合える関係を築いていきます。

冬の体験プログラム

スノーワンダーランド

自然・自分・仲間と向き合う
葛巻町のことを知ってほしい

今年1月5日から18日まで、県内や東京都、遠くは福岡県など小学校1年生から中学校2年生までの28人が参加しました。

子どもたちは何を求め、また親たちは何を願い参加させたのでしょうか。ホームステイ先の農家の皆さんはどのような思いで受け入れているのでしょうか。それぞれ感想を伺いました。

子牛が生まれて感動

清水野さんは「初めてなので当日までは不安でした。どんな子が来るのか、一番の気がかりは食事のこと。でも、

大人びて見えます。居心地の良い家庭環境と、教育とは子どもの自立に向けたものという概念とが相反しないものであるためにも、皆様のような存在が不可欠と考えさせられました。次は、家族そろって葛巻に「赴きたい」とメールを寄せています。

「とでもいい子たちでした。自然の大切さや酪農のことを少しでも理解してもらえればいいと思います。『牛乳飲んでもらわないと、おじちゃんたち大変なんだ』と話したら牛乳の飲めない子が口にしてくれた。かわいいですね。いいことなので、もっと多くの人に経験してもらいたい。特に子育て世代にとっては勉強になることが多いと思いますよ。受け入れは、自分たちの町をアピールし、田舎

「とでもいい子たちでした。自然の大切さや酪農のことを少しでも理解してもらえればいいと思います。『牛乳飲んでもらわないと、おじちゃんたち大変なんだ』と話したら牛乳の飲めない子が口にしてくれた。かわいいですね。いいことなので、もっと多くの人に経験してもらいたい。特に子育て世代にとっては勉強になることが多いと思いますよ。受け入れは、自分たちの町をアピールし、田舎

普段どおりに自然体で

清水野さんは「初めてなので当日までは不安でした。どんな子が来るのか、一番の気がかりは食事のこと。でも、

町の理解者を増やす

折元金喜千さん（51歳・遠矢場）は三回目の受け入れ。今回初めて女子を希望し、二人受け入れました。

「とでもいい子たちでした。自然の大切さや酪農のことを少しでも理解してもらえればいいと思います。『牛乳飲んでもらわないと、おじちゃんたち大変なんだ』と話したら牛乳の飲めない子が口にしてくれた。かわいいですね。いいことなので、もっと多くの人に経験してもらいたい。特に子育て世代にとっては勉強になることが多いと思いますよ。受け入れは、自分たちの町をアピールし、田舎



清水野さんの子どもたちと参加者

今後の体験交流の展望

公社では、体験交流の新たな試みを目指して昨年から企画担当職員を配置し、体験プログラムの充実を図っています。今後は、多面的な機能を有する牧場の環境を「保育・教育・やすらぎ・再生の場」として活用していきます。

- 保育の場：未就学児を対象とした屋外自然保育
- 教育の場：体験学習等をベースとした長期山村生活体験（キャンプ）
- やすらぎの場：親子の自然体験活動のサポート
- 再生の場：不登校・引きこもり・ニートの自立支援